

潰瘍性大腸炎周術期の血栓塞栓症に関する多施設前向き研究

研究分担者／研究協力者 氏名板橋道朗 所属先東京女子医科大学外科学講座炎症性腸疾患外科学分野 役職 教授・基幹分野長

研究要旨：日本の潰瘍性大腸炎手術における周術期 VTE の発生率と危険因子を明らかにすることを目的とした。周術期の深部静脈血栓症（DVT）と肺塞栓症（PE）は、それぞれ 15 人（11.1%）と 1 人（0.7%）で診断され、すべて無症候性であった。VTE を意識した周術期管理は、西洋諸国と同様にアジアでも必要である。

共同研究者

池内浩基（兵庫医科大学）木村英明（横浜市立大学）福島浩平（東北大学）藤井久男（奈良県立医科大学）根津理一郎（西宮市民病院）二見喜太郎（福岡大学筑紫病院）杉田 昭（横浜市民病院）鈴木康夫（東邦大学佐倉病院）久松理一（杏林大学）

A. 研究目的

近年、炎症性腸疾患（IBD）のアジア人患者における静脈血栓塞栓症（VTE）の有病率は徐々に増加している。IBD 手術は、VTE の危険因子です。しかしながら、アジアにおける潰瘍性大腸炎（UC）周術期 VTE の頻度は不明である。本研究は、日本の UC 手術における周術期 VTE の発生率と危険因子を明らかにすることを目的とした。

B. 研究方法

2013 年 1 月 1 日から 2014 年 12 月 31 日までに合計 134 人の UC 患者が登録された。すべての患者で術前スクリーニングが実施、周術期には、リスクアセスメントに基づく標準的な VTE 予防が実施された。術前および術後の VTE の有病率、その危険因子、および死亡率を調査した。

（倫理面への配慮）

本研究は、東京女子医科大学の倫理委員会（承認番号：130207）および各参加機関でも倫理的

承認を得た。また、登録前にすべての患者からインフォームドコンセントを得た。

C. 研究結果

周術期の深部静脈血栓症（DVT）と肺塞栓症（PE）は、それぞれ 15 人（11.1%）と 1 人（0.7%）で診断され、すべて無症候性であった。手術関連の死亡はなく（死亡率 0%）。術前に 7 人（5.2%）が、術後に 8 人（6.4%）が診断された。VTE 症例の 47% は術前に発症、5 日を超える術前入院期間はリスク因子であった [P=0.04; オッズ比：8.26 (1.06-64.60)] 術後 DVT は 8 人（6.4%）で発生、6 例（75.0%）は、術後 14 日以内に発生した。

D. 結論

VTE を意識した周術期管理は、西洋諸国と同様にアジアでも必要である。

E. 研究発表

1. 論文発表

Crohn's & Colitis 360, Volume 3, Issue 3, July 2021, otab024, <https://doi.org/10.1093/crocol/otab024>

F. 知的財産権の出願・登録状況

なし